

# 仙台平野における 弥生津波伝承と古墳前期首長墳の築造位置

斎野 裕彦

## はじめに

仙台平野において、弥生時代中期中葉中段階（中在家南式期）に起こった地震・津波による大震災（以下「弥生大震災」）は、沿岸部の集落を廃絶させて生業の技術体系の再編成を促し、それ以降は、畑作を組み入れて、津波の遡上域以西で分散化した構造の農耕集落を形成していた（斎野 2017, 2021）。それが古墳時代前期になると、再び沿岸部に水田稻作を主として集約的な農耕を営む集落が進出し、平野や丘陵に古墳が築造される（第1図）。この変化は、津波被害を受けて変更された自然観に優先して、水田稻作適地の生産性を重視した資源観にもとづいているが、沿岸部への再進出の実態解明は進んでいない。そうしたなかで、近年、岩沼市のかめ塚古墳の調査が行われ、前方後円墳本来の墳丘がより大きく、周溝を伴うことも判明した（岩沼市教育委員会 2021）。

ここでは、かめ塚古墳が現海岸線から約6kmにあり、その位置が弥生大震災の津波（以下「弥生津波」）の遡上限界附近（第2図：松本 2011）に相当することから、雷神山古墳や遠見塚古墳などの古墳を含めて検討を行い、首長墳築造の要因について考えてみたい。

## 1. 岩沼市かめ塚古墳の調査成果

かめ塚古墳は、岩沼市字亀塚に所在し、昭和25年(1950)に宮城県の史跡に指定されている（第3図）。第I浜堤列の西側に立地し、現海岸線から約6kmに位置する。標高は約3mである。墳丘主軸長39.5mの前方後円墳で、後円部径16.3m、前方部幅10.3mで、高さは後円部2.45m、前方部2.05mと報告されていた。しかし、平成24年(2012)の第1次発掘調査では、部分的な調査であったが、現在の墳丘が後世の耕地整理などで大きく改変されており、本来は墳丘主軸長約48m、後円部径約25m（第4図）と想定され、周溝底面から第5図のように一木二又鋤（長さ102cm、幅14.4cm、厚さ3cm）が1点出土している（千葉 2015a、千葉他 2018）。同じ形態の鋤は、押口遺跡第3次調査南区河川跡12層（古墳前期：仙台市教育委員会 2002）から1点（第6図左端）、中在家南遺跡の第1次調査II区河川跡12層（古墳前期：仙台市教育委員会 1996）から1点、第6次調査河川跡11層（古墳前期：仙台市教育委員会 2015）から1点、ほかに一木三又鋤が1点出土している。その後、令和2年(2020)12月から翌年2月にかけて第2次発掘調査（岩沼市教育委員会 2021）が行われ、古墳全体を対象とした範囲確認調査で築造時の大きさが復元され、暫定計測値として、墳丘主軸長48.5m、後円部径26.1m、前方部長22.4m、前方部前端幅23.3m、くびれ部幅11.2mと報告されている（第7図）。周溝は全周をめぐると推定されるが、トレンチ調査では、第8図のように、後円部の東側で幅11.24m、前方部の

南側で幅 6.64m である。築造された時期は、古墳時代前期と考えられており（藤澤 2015、岩沼市教育委員会 2021）、前述の中在家南遺跡などで一木二又鋤に伴う土器は、塙釜式土器のなかで最も新しい特徴がみられる（仙台市教育委員会 2010a）。墳丘の主軸方向は北北東方向で、東方に平野が広がる地形環境にある。

周辺の遺跡には、かめ塚古墳の南側にかめ塚西遺跡がある。かめ塚古墳の第2次調査と同時期に遺跡全体を対象とした範囲確認調査が行なわれており（岩沼市教育委員会 2021）、遺跡西部で古代を主とする遺構・遺物を検出しているが、古墳時代前期の遺構・遺物は確認されていない。このほか、採集資料として弥生時代の石斧 1 点が知られている（千葉 2015b）。

## 2. 仙台平野における古墳時代前期の首長墳

仙台平野の古墳時代前期の墳墓には、前方後円墳、前方後方墳、方墳、円墳のほか、方形周溝墓などがあり、それらは平野の自然堤防や浜堤列、あるいは平野に面する丘陵縁辺部に立地している。

### （1）古墳時代前期の前方後円墳

この地域の古墳時代前期の前方後円墳には、かめ塚古墳のほかに、墳丘主軸長が 100m を超える名取市の雷神山古墳、仙台市の遠見塚古墳が知られている（第9図）。

雷神山古墳は、名取市植松字山・愛島小豆島字片平山に所在し、愛島丘陵東端に立地している。標高は約 40m である。同じ丘陵にある飯野坂古墳群とは、谷地形を挟んで南に 1 km 離れて位置している。墳丘主軸長は 168m、後円部径 96m、前方部長 72m である。三段築成で、高さは 6m である。周囲には、周溝が一部に認められている。埋葬主体部の調査は行なわれていない。築造された時期は、古墳時代前期の末葉と考えられている。北側には、墳丘主軸の延長上に径 54m の円墳：小塚古墳が陪塚として築造されている。雷神山古墳と陪塚の周辺には、この時期の集落遺跡はなく、他に古墳も築造されていない。墳丘の主軸方向は北東方向で、東方に平野が広がる地形環境にあり、現海岸線からの距離は約 6 km である。

遠見塚古墳は、仙台市若林区遠見塚一丁目ほか、に所在する。標高約 10m の自然堤防に立地している。墳丘主軸長は 110m、後円部径 63m、前方部長 47m である。後円部は二段築成で、高さは 6.5m である。周囲には、幅 10 数 m～40 数 m の周溝がめぐる。後円部に埋葬主体部があり、発掘調査では古墳の主軸方向に平行して粘土櫛が 2 基検出されており、棺は割竹形木棺と推定される。築造された時期は、古墳時代前期の末葉と考えられている。古墳は南小泉遺跡の範囲内にあり、古墳時代中期以降、古墳の西側に居住域が広く営まれるようになる（第10図：斎野 2023b）。古墳の周辺には、古墳時代前期の遺構は極めて少なく、この時期の集落の展開は認められず、他に古墳は築造されていない。墳丘の主軸方向は北方向で、東方に平野が広がる地形環境にあり、現海岸線からの距離は約 6 km である。

二つの前方後円墳は、かめ塚古墳と同様、集落から離れた場所に築造されており、東方に平野が広がり、海岸線からの距離がほぼ同じという共通性がある（第11図）。

## (2) 飯野坂古墳群の前方後方墳

飯野坂古墳群は、名取市飯野坂五丁目から名取が丘一丁目に所在し、標高およそ30mの丘陵に立地している。古墳群は、前方後方墳5基と方墳2基で構成されており、5基連なる前方後方墳は、この地域の首長の系譜を示すと考えられる(第12図)。埋葬主体部などの発掘調査は行われておらず、それらの築造の順序は明確ではないが、測量調査による前方後方墳の大きさは、以下に示すように、墳丘主軸長は40m~65m、主軸方向はN-28°~49°-Wである(名取市教育委員会1986)。これらは、主軸方向を丘陵縁辺の方向に沿うように、凹凸のある丘陵の凸部に築造されている。

山居北古墳：主軸長40m、後方部長(記載なし)、前方部長16m、主軸方向N-42°-W。

山居古墳：主軸長60m、後方部長24m、前方部長30m、主軸方向N-28°-W。

観音塚古墳：主軸長60m、後方部長30m、前方部長32m、主軸方向N-28°-W。

宮山古墳：主軸長60m、後方部長30m、前方部長30m、主軸方向N-49°-W。

薬師堂古墳：主軸長65m、後方部長30m、前方部長29m、主軸方向N-44°-W。

飯野坂古墳群を築造した主体は、山居北古墳の西方500m~1500mの丘陵に立地する十三塚遺跡に居住域を形成していた集落と考えられる。この集落は、弥生時代前期には、飯野坂古墳群に隣接して遠賀川系土器も採集されている飯野坂遺跡にまで広がっており、その後、丘陵と北方の低地にも居住域、生産域、墓域を形成しながら存続し、古墳時代前期になって新たに営んだ墓域が飯野坂古墳群と理解される。

## (3) かめ塚古墳の位置づけ

かめ塚古墳は、墳丘の大きさでは雷神山古墳、遠見塚古墳より小さいが、前方後円墳という墳形は同じで、周溝をもっている共通性もある。

飯野坂古墳群の前方後方墳5基とかめ塚古墳を比べると、墳形は異なるが、墳丘主軸長は、前者が40m~65m、後者が墳丘主軸長48.5mで、大きな違いはない。

仙台平野では、飯野坂古墳群のほかに、古墳時代前期の古墳群が仙台市の沼向遺跡で検出されている(仙台市教育委員会2000a、2010a)。この古墳群は、方墳3基、円墳10基で構成され、方形周溝墓7基とともに墓域を形成している(第13図)。墳丘は残っておらず、周溝が確認されている。方墳の周溝は、外側24.6~17.2m、内側14.7~11.6m、円墳の周溝は、外径22.0~11.7m、内径:12.4~7.0m、方形周溝墓の周溝は、外側11.2~5.7m、内側7.0~4.2mである。飯野坂古墳群の2基の方墳は、一辺の長さが14.4mと14.2mと報告されている。

飯野坂古墳群と沼向遺跡の墓域には、前方後円墳がなく、方墳の存在は共通しており、加えていずれも周辺に古墳築造の主体となった集落の居住域が形成されている。飯野坂古墳群は前述の通りで、沼向遺跡の墓域には、方墳、円墳、方形周溝墓という三種類の墓があり、それらに大きさの違いが見られ、多様な埋葬者が想定されるのに対して、飯野坂古墳群では、5基連なる墳丘主軸長40m~65mの前方後方墳は、それぞれを丘陵凸部に築造して個々に独立して見えるような選地がなされており、この地

域の首長の系譜を示している。

かめ塚古墳は、二つの古墳群、墓域とは異なり、墳形が前方後円墳で、集落から離れた位置に築造されており、東方に平野が広がる。この特徴は、墳丘主軸長は異なるが、雷神山古墳、遠見塚古墳と共に通する。遠見塚古墳の西側には、築造後、古墳時代中期～後期に広く居住域が形成されており、古墳に埋葬された首長の系譜にある人々の集落の存在を示している（第10図：斎野2023b）。

また、墳丘の形態と大きさから、3基の前方後円墳には、

A後円部半径/墳丘主軸長：雷神山 28.6、遠見塚 28.6、かめ塚 26.9

B墳丘主軸長比：雷神山を 100（168m）として、遠見塚約 65.5（110m）、かめ塚約 29（48.5m）という関係がある。現在の計測値が築造時の数値とどの程度異なっているのかはわからないが、Aの数値は、雷神山古墳と遠見塚古墳と同じで、かめ塚古墳も近似値を示し、区切りのいい数値としては 30 が想定される。3基の古墳は、墳丘主軸長を 100 とした場合、後円部径(30+30)60：前方部長 40 として築造されたと想定される。飯野坂古墳群の前方後方墳（山居北を除く）に比べると、後方部長 50：前方部長 50 が 3 基（山居、観音塚、宮山）、後方部長 46：前方部長 54 が 1 基（薬師堂）と異なっている。Bの数値は大きく異なることに特徴があり、雷神山古墳の墳丘主軸長を 100 として、それよりおよそ 35 短い数値が遠見塚古墳、さらに 35 短く、雷神山古墳よりおよそ 70 短い数値（雷神山古墳の後円部半径値）がかめ塚古墳の 30、と理解される（第14図）。飯野坂古墳群には、各前方後方墳間に、こうした関係はない。

このように、かめ塚古墳は、飯野坂古墳群の前方後方墳とは首長墳としての性格に違いがあり、墳丘主軸長は異なるが、前方後円墳の雷神山古墳、遠見塚古墳と同様、独立性が強く、ほぼ同じ時期に、より広い地域を治める新たな首長の墓として築造されたのである。

### 3. 平野中部における古墳時代前期の集落形成

平野中部の名取川下流域では、弥生津波で廃絶した農耕集落と同じ場所に、古墳時代前期に再び農耕集落が形成されている。なかでも下流域左岸では、藤田新田遺跡、高田B遺跡、中在家南遺跡、沓形遺跡で確認される。

#### （1）藤田新田遺跡

仙台市若林区荒井字藤田新田に所在する。標高は約 1m である。自然堤防と旧河道に立地する。古くから弥生時代中期中葉の遺跡として知られていたが、平成3年(1991)の調査（宮城県教育委員会1994a）で、古墳時代前期の居住域と墓域が検出されている。主な遺構は、竪穴住居5軒、方形周溝墓2基、土坑3基などである（第15図）。

#### （2）高田B遺跡

仙台市若林区日辺字千刈田に所在する。標高は約 4 m である。自然堤防と旧河道に立地する。平成元年(1989)に見つかった遺跡で、平成5年(1993)にかけて発掘調査が行われた（宮城県教育委員会1994b、仙台市教育委員会2000b）。縄文時代後期中葉から近世にかけての遺構・遺物が検出されてい

る。弥生時代中期中葉中段階には、西側の旧河道に水田が営まれており、その水田構造はⅢB類で、成立基盤が谷状の地形面に立地するⅢ類、水田形態が小区画を指向するB類である（斎野 2005）。東側の旧河道には遺物包含層が形成されており、周辺の自然堤防に立地する今泉遺跡などとともに居住域、墓域を形成する農耕集落が営まれていた。遺物包含層の形成過程をみると、弥生津波で集落が廃絶した弥生時代中期中葉中段階までは、多くの土器、石器、木製品の出土が認められるが、その後は極端に減少し、古墳時代前期になって土器や木製品の出土が認められるようになる。木製品には、農工具として、膝柄又鋤の身、直柄広鋤の身、一木平鋤のほか、鎌柄があり（第16図）、再び農耕活動が行なわれたことを示している。

### （3）中在家南遺跡

仙台市若林区荒井字中在家他に所在する。標高は約5m～6mである。自然堤防と旧河道に立地する。昭和63年(1988)～平成5年(1993)の調査で、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されている。弥生時代中期中葉中段階には、周辺の後背湿地に立地する沓形遺跡と荒井南遺跡でいずれも20ヘクタールの水田域が見つかっており、自然堤防と旧河道に立地する押口遺跡などとともに居住域、墓域を形成する農耕集落が営まれていた。旧河道には遺物包含層が形成されており、その形成過程をみると、弥生津波で集落が廃絶した弥生時代中期中葉中段階に、多くの土器、石器、木製品の出土が認められる。しかし、その後は極端に減少し、古墳時代前期になって、自然堤防で方形周溝墓（第17図）が検出されるとともに、旧河道の遺物包含層に土器や木製品の出土が認められるようになる（仙台市教育委員会 1996）。木製品には、農工具として、膝柄又鋤の身、直柄広鋤の身、直柄狭鋤の身、エブリの身、一木二又鋤のほか、膝柄鋤の柄があり（第18図、第19図）、近傍の押口遺跡でも、同時期の膝柄又鋤の身、直柄広鋤の身、直柄狭鋤の身、エブリの身のほか、鎌柄があり（第20図）、再び農耕活動が行なわれたことを示している。

### （4）沓形遺跡

仙台市若林区荒井字沓形、矢取東他に所在する。標高は約2.5mである。後背湿地に立地する。平成19年(2007)～平成5年(1993)の調査で、弥生時代中期前葉から中葉にかけての水田跡、古墳時代前期の水田跡、平安時代から中世の水田跡と、それらに伴う遺物が検出されている。弥生時代中期中葉中段階には、周辺の後背湿地に立地する荒井南遺跡とともに、20ヘクタールの水田域が見つかっている。弥生時代中期中葉の水田跡は、津波堆積物に覆われて廃絶しており、復旧はなされなかった。この水田跡は、ⅡB類・ⅢB類の水田構造であり、一区画の面積は16～25m<sup>2</sup>である。その後古墳時代前期になって再び営まれた水田はⅡB類（成立基盤Ⅱ類は、ほぼ平坦な地形面：勾配≤1%）で、一区画の面積は、10～25m<sup>2</sup>である（第21図：仙台市教育委員会 2010b）。

このように、4遺跡を通してみると、古墳時代前期に沿岸部へ進出した農耕集落は、弥生津波で廃絶した集落の場所に再び形成されており、開田した水田の主たる構造は、この地域で弥生時代前期から認められているⅡB類である。

#### 4. 平野北部における古墳時代前期の集落形成

平野北部の沿岸部では、弥生津波で廃絶した被災遺構は明確でない。しかし、平野中部と同様、弥生時代中期中葉新段階から後期にかけて、推定される弥生津波の遡上域に農耕集落が認められない傾向があり、古墳時代前期になって再び農耕集落を形成している。

##### (1) 山王遺跡・新田遺跡に営まれた古墳時代前期水田

多賀城市的山王遺跡から新田遺跡にかけて、第22図のように、古墳時代前期の水田跡が広く認められており（多賀城市教育委員会2006など）、その面積は100ヘクタールを超えている。

山王遺跡多賀前地区では、I区からIII区にかけて広く水田跡が検出されている（第23図：宮城県教育委員会1995、宮城県教育委員会2018など）。一区画の平面形は方形～長方形を基調としており、各区の検出数と面積は以下の通りである。

I区：48区画を検出、一区画の面積が確認されたのは7区画で、最小9m<sup>2</sup>、最大30m<sup>2</sup>、15～25m<sup>2</sup>にほぼ集中する。

II区：79区画を検出、一区画の面積が確認されたのは28区画で、最小9m<sup>2</sup>、最大20m<sup>2</sup>である。

III区：19区画を検出、一区画の面積が確認されたのは5区画で、最小9m<sup>2</sup>、最大25m<sup>2</sup>である。

##### (2) 水田構造ⅡB類の共通性

山王遺跡の水田跡の水田一区画は、一辺3m～5mと現代の区画に比べると遥かに小さく、それらによって構成される水田は、隣接する水田区画間に田面の高低差がほとんどない。そのため、水田の構造は、成立基盤をⅡ類：ほぼ平坦な地形面（勾配≤1%）、水田形態をB類：小区画を指向する区画、とするⅡB類に分類される（第24図：斎野2005、2011）。この水田構造は、東北地方において、弥生時代前期（末葉）に、他の水田構造とともに認められ（斎野2022a）、中期前葉になると主たる水田構造となり、中期中葉には富沢遺跡、沓形遺跡、荒井南遺跡などで10～20ヘクタールの水田域が検出されており、農耕集落の主たる生産域を構成していた（斎野2023a）。

では、このⅡB類のような小区画水田は、どのような理由で主たる水田構造として用いられたのだろうか。これまでの発掘調査では、青森県田舎館村の弥生時代中期の水田で、数多くの水田区画の中に休耕田が認められ、それらはイネの生育に伴って田面に日光が届きにくくなる生育水田とは異なり、日光で温めた水を生育水田へ注ぐ機能（昇温灌溉）が考えられた（斎野2005）。そして、近代の機械化以前の農業では、水田稻作の北限域だった北海道やサハリン南部において、移植栽培（田植え）に比べて直播栽培（点播）の有効性が確認されている（斎野2020）。東北地方に多く、小さな苗代田を数多く格子状に並べたようなⅡB類の水田は、寒冷地における工夫として、点播による直播栽培と、昇温灌溉を組み合わせてイネを生育させる農耕技術の存在を示している（斎野2024c）。ⅡB類の水田構造は、東海・関東地方の弥生時代には認められておらず、仙台平野では、弥生津波以降も遡上域の西方で存続しており、古墳時代前期の沿岸部への農耕集落の再進出において、有効な技術として広く用いたのであり、その担い手は、ⅡB類の水田を営んできた、この地域の人々であった。

### (3) 遺跡の消長と沿岸部への農耕集落の再進出

自然堤防に立地する山王遺跡と東側に隣接する市川橋遺跡では、下層の調査で、弥生時代中期中葉古段階～中段階の遺物包含層が確認されている（宮城県教育委員会 2009）。中期中葉中段階の終り頃に起こった弥生大震災以降は、遺物包含層は形成されていない。二つの遺跡は、現海岸線から5～6kmにあることから、それに関わる集落は、弥生津波に伴って廃絶したと推定され、その後自然堆積が進み、古墳時代前期になると、遺構・遺物が認められるようになる。

新田遺跡の西方約1.5kmにあり、後背湿地に立地する高江遺跡では、弥生時代中期中葉中段階の水田跡が検出されており、堆積層に覆われてそのまま廃絶している（第25図：仙台市教育委員会 2022）。この水田を覆う堆積層には、土器や石器が比較的多く含まれており、やや標高の高い遺跡西側に居住域が想定され、主たる水田域は、遺跡東方の低地を選地していた可能性がある。遺跡範囲は弥生津波の遡上域に含まれないが、集落は、主たる水田域が津波被害を受けて存続できなくなったのだろう。

また、新田遺跡の北西方約1.5kmにあり、標高約30mの丘陵に立地する羽黒前遺跡では、弥生時代中期後葉以降、土器棺墓や土壙墓とみられる土抗群などの遺構と後期末葉までの遺物が認められている。遺物には打製の石鍬が認められ、平野中部・南部と同様、丘陵での生業活動の一端を示している。古墳時代前期には、尾根の狭い平坦面で周溝状遺構（方墳あるいは方形周溝墓：周溝外側は東西9.5m、南北9.1m）が1基検出されている（第26図：利府町教育委員会 2023）。遺跡の継続性からすると、周溝状遺構は、弥生時代中期後葉以降、この丘陵を含む集落を営んできた人々によって造られ、その後、新たに造られなかった要因は、沿岸部への集落の進出にあると考えられる。

このように、平野北部においても、平野中部と同様、弥生大震災を契機として生業の技術体系の再編成がなされ、古墳時代前期に農耕集落が沿岸部に再び進出していることが再確認される。

## 5. 古墳時代前期の首長墳の築造位置

弥生津波の遡上域の西縁は、その後の弥生時代の土地利用を見ると、災害が生んだ結界でもある。3基の前方後円墳はそこに築造されており、新たな価値観の存在を示している。

### (1) 弥生津波の遡上限界と遡上域の認識

弥生津波の遡上距離は、当時の海岸線から4.2kmと推定されている（松本 2011）。当時の海岸線は、第II浜堤列の海側に位置しており、現在の海岸線から2km陸側にあった（松本 1984）。そのため、現在の地図上では、弥生津波の遡上限界は、海岸線から6.2kmを前後する位置に想定される。その東方の遡上域には、弥生大震災以降、中期中葉新段階から中期後葉、そして後期にかけて、農耕集落は形成されていないが、弥生津波で廃絶した居住域から、数は少ないながら弥生土器や石鍬などの石器が認められている。高田B遺跡では中期中葉新段階の土器が複数認められ、中在家南遺跡では、第6次調査の河川跡13層から中期中葉新段階の土器が2点、12層から中期後葉の土器が4点（第27図）、第1次調査のII区からは後期初頭～前葉の土器4点、などが出土している。また、沼向遺跡では、農耕集落は形成されていなかったが、弥生大震災以降も古墳時代前期の直前まで、数は少いものの、各時期の土器が出土している（仙台市教育委員会 2010a）。それらの大半は破片資料であるが、廃絶し

た集落と継続的に関わりをもっていた人々の存在を示している。

これらの痕跡から、津波遡上域での活動としては、狩猟や漁撈が推定されるが、出土土器の継続性は、被災以降も、その活動をしながら被災者と子孫が、廃絶した集落の土地を管理し続けていた可能性を考えさせる。それと関連するように、古墳時代前期になると、再び集落が形成された沼向遺跡では方墳、円墳、方形周溝墓で構成される墓域、中在家南遺跡では方形周溝墓による墓域が形成されている。その点では、藤田新田遺跡の方形周溝墓による墓域の形成も同様の経緯があったのだろう。

## (2) 古墳時代前期の首長墳の築造位置

弥生大震災以降、弥生津波の遡上域に農耕集落が形成されなかつたのは、津波被害に起因する自然観の変更によるが、遡上限界の位置が長く被災した人々とその子孫だけでなく、平野の人々にも、受け継がれてきたことを示している。

仙台平野における農耕集落の形成では、居住域よりも生産域の水田稻作適地の選地が重視されており、平野中部では、沓形遺跡のように、弥生津波で廃絶した水田域に同じ構造の水田が開田されている。水田稻作技術は、水田域外の施設と水田域内の施設によって組織化されており（斎野 2024c）、適地選択型の II B 類の水田の造成は、この構造の水田を弥生時代前期（末葉）から営んできた仙台平野の人々によって行なわれた。

そして、沿岸部への集落の進出に伴って、古墳が築造され、方形周溝墓が造営される。それらには、飯野坂古墳群のように前方後方墳と方墳で構成される墓域、沼向遺跡のように方墳、円墳、方形周溝墓で構成される墓域、藤田新田遺跡や中在家南遺跡のように方形周溝墓で構成される墓域があり、いずれも集落の居住域が近傍に存在している。その一方で、周辺に集落が存在せず、古墳の墳形も異なる 3 基の前方後円墳が、間隔を空け、独立性を保って、弥生津波の遡上限界付近に築造される（第 11 図・第 14 図）。それらは、弥生津波以前に農耕集落が展開していた津波遡上域の西縁に沿うように、結界に位置し、墳丘主軸方向を北～北東方向として、東方には新たに農耕集落が進出した平野が広がる共通性がある。

このように、3 基の前方後円墳は、古墳時代前期になって農耕集落が弥生津波の遡上域に再進出する集落動態と深く関わっており、それまでの自然観に優先して資源観を重視した新たな沿岸部での活動を見守るような位置に築造されている。それら 3 基は、首長墳としてだけでなく、津波防災のランドマークとしての機能を合わせもっており、防災遺構としても評価する必要がある。

## 6. 弥生津波伝承

かめ塚古墳の新知見を確認し、仙台平野の古墳時代前期の前方後円墳の築造位置の検討によって、弥生時代中期中葉中段階の弥生大震災から古墳時代前期まで、およそ 400 年にわたって弥生津波による災害が伝承されてきたことが推定された。3 基の前方後円墳の築造主体には、津波遡上域における農耕活動の再開に対して共通する地域支配の認識があり、それにもとづいて、沿岸部への農耕集落の進出がなされたと考えられる。そして、雷神山古墳、遠見塚古墳、かめ塚古墳に、陪塚の有無や、墳

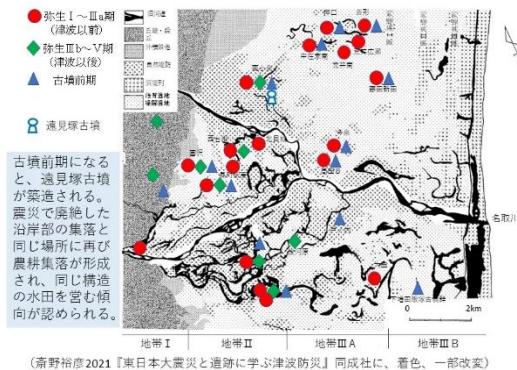
丘主軸長などに違いがあるのは、政治的な権力構造における序列の成立を明示する目的があったのだろう。かめ塚古墳を含む3基の前方後円墳の築造は、集落動態と連動しており、仙台平野の新たな価値観を伴う社会への移行を示している。この変化の要因は、北方、西方の地域との政治的・経済的な交渉を伴う広域流通網の進展にあるが、前方後円墳3基の築造位置は、そうした状況においても、この地域の人々が、弥生津波の伝承をその後も語り継ぎ、防災行動をとっていたことを教えてくれる。

また、他の地域では、弥生津波の災害伝承はどこまで広がっていたのだろうか。弥生大震災の津波の遡上距離は、東日本大震災の津波と同じかやや大きいと推定されている。それが仙台平野のように古墳時代前期の首長墳の築造位置に反映されていれば、津波災害伝承が、語り継がれていた可能性がある。仙台平野の南方にある福島県太平洋沿岸部（浜通り地域）では、いわき市の夏井川下流沖積平野の浜堤列地形の形成において、仙台平野ほど海岸線が海側へ前進してはおらず、弥生時代の海岸線は、現在の海岸線に近い位置にあった（斎野 2017）。仙台平野を含む東北地方南部の古墳時代前期の主要古墳を比較研究した柳沼（2012）は、そのなかで、浜通り地域では、南相馬市桜井古墳（前方後方墳：墳丘主軸長 75m）、浪江町元屋敷1号墳（前方後方墳：墳丘主軸長 36.5m）、浪江町堂の森古墳（前方後円墳：墳丘主軸長 57.1m）、いわき市玉山古墳（前方後円墳：墳丘主軸長 112m）の4基を紹介し、位置を地図に示している。これらを、東日本大震災の津波の浸水域（昭文社 2011）と比較すると、いずれの古墳も津波浸水範囲にはなく、そこよりやや離れた位置や近傍の標高の高い段丘や丘陵に築造されている。こうした視点から、浜通り地域においても弥生津波が伝承されていたのか、そして、さらに南方の太平洋沿岸部に確認できるのか、検討を要するであろう。

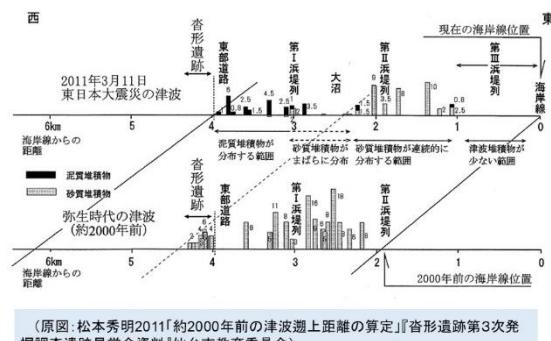
## おわりに

「弥生津波伝承」をキーワードとして、災害・防災考古学（斎野 2022b、2023c、2024a、2024b）の新たな研究分野へのアプローチを進めた。その過程で感じられたのは、これまでに発掘調査が行われてきた各地域の数多くの遺跡には、災害を伝承した痕跡が埋没している蓋然性である。災害・防災考古学の一つの方法として、今回対象とした仙台平野の津波災害伝承（第1図）、以前対象とした小田原市中里遺跡の洪水災害伝承（第28図：斎野 2022c、2023c）のように、それぞれの地域において長期にわたって伝承された災害と被災を想定した防災行動の推定は十分に可能である（第29図・第30図）。重視したいその端緒は、遺跡における災害の痕跡：被災遺構の明確な検出であり、それを起点として埋没していた災害伝承の復元によって、今日の防災における災害伝承活動の史的基盤を形成できる。将来的に大切にしたいのは、こうした埋没災害伝承をいくつも見出して、それらを時間軸に沿って重ね合わせ、過去から現代までを繋いで、地域の災害と防災の歴史として、後世に伝承していくことである。今後、各地域における埋没災害伝承が、地球規模で面的にも繋がっていくように、この分野の研究の進展に期待したい。

- 岩沼市教育委員会 2021『市内遺跡発掘調査報告書3』第28集
- 斎野裕彦 2005「水田跡の構造と理解」『古代文化』第57巻第5号 pp.43-63 古代学協会
- 斎野裕彦 2011「東北地域」『講座日本の考古学5 弥生時代(5)』pp.430-484 青木書店
- 斎野裕彦 2017『津波災害痕跡の考古学的研究』同成社
- 斎野裕彦 2020「特輯「東北地方の「弥生文化」を外からの視点で考える」に寄せて」『古代文化』第72巻第3号 pp.23-26 古代学協会
- 斎野裕彦 2021『東日本大震災と遺跡に学ぶ津波防災』同成社
- 斎野裕彦 2022a「東北南部(仙台平野)の水田跡と農具組成」『日本考古学協会第88回総会資料』pp.43
- 斎野裕彦 2022b「災害考古学と防災・減災への貢献」『第1回日本災害・防災考古学会研究会資料・予稿集』pp.1-16
- 斎野裕彦 2022c「東北地方の弥生文化からみた中里遺跡」『南関東の弥生文化－東アジアとの交流と農耕化』pp.33-57 吉川弘文館
- 斎野裕彦 2023a「東北からみた弥生文化」『弥生文化博物館研究報告』第8集 pp.39-50 大阪府立弥生文化博物館
- 斎野裕彦 2023b『最北の国分寺と蝦夷社会－仙台平野からみた律令国家』敬文舎
- 斎野裕彦 2023c「災害・防災考古学の方法」『第2回日本災害・防災考古学会研究会資料・予稿集』pp.184-197
- 斎野裕彦 2024a「東日本大震災と災害・防災考古学」『文化財科学』第88号 pp.97-100 日本文化財科学会
- 斎野裕彦 2024b「考古学と災害」『考古学研究会70周年記念誌：考古学の輪郭』pp.204-205 考古学研究会
- 斎野裕彦 2024c「Q22 灌溉水田について教えてください」「Q&Aで読む弥生時代入門」pp.100-104 吉川弘文館
- 昭文社 2011『東日本大震災復興支援地図－太平洋沿岸地域』
- 仙台市教育委員会 1996『中在家南遺跡他』第213集
- 仙台市教育委員会 2000a『沼向遺跡第1～3次調査』第241集
- 仙台市教育委員会 2000b『高田B遺跡』第242集
- 仙台市教育委員会 2002『中在家南遺跡(第3・4次)・押口遺跡(第3次)発掘調査報告書』第255集
- 仙台市教育委員会 2010a『沼向遺跡第4～34次調査』第360集
- 仙台市教育委員会 2010b『沓形遺跡』第363集
- 仙台市教育委員会 2015『中在家南遺跡第6次調査ほか』第434集
- 仙台市教育委員会 2022『高江遺跡第1次発掘調査』第502集
- 多賀城市教育委員会 2006『山王遺跡－第51・54・57次調査報告書』第81集
- 千葉宗久 2015a「かめ塚古墳」『岩沼市史第4巻資料編I考古』pp.122-126 岩沼市史編纂委員会
- 千葉宗久 2015b「かめ塚西遺跡」『岩沼市史第4巻資料編I考古』pp.127-128 岩沼市史編纂委員会
- 千葉宗久・川又隆央・徳竹亜紀子 2018「古墳時代の岩沼」『岩沼市史第1巻通史編I原始・古代・中世』pp.106-154 岩沼市史編纂委員会
- 名取市教育委員会 1986『史跡飯野坂古墳群－前方後方墳群の測量調査』第17集
- 藤沢 敦 2015「不安定な古墳の変遷」『東北の古代史2 倭国の形成と東北』pp.107-133 吉川弘文館
- 松本秀明 1984「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動」『地理学評論』第57巻第10号 pp.720-738
- 松本秀明 2011「約2000年前の津波溯上距離の算定」『沓形遺跡第3次発掘調査遺跡見学会資料』仙台市教育委員会
- 宮城県教育委員会 1994a『藤田新田遺跡』第163集
- 宮城県教育委員会 1994b『高田B遺跡－第2次・3次調査』第164集
- 宮城県教育委員会 1995『山王遺跡II 多賀前地区遺構編』第167集
- 宮城県教育委員会 2009『市川橋遺跡の調査』第218集
- 宮城県教育委員会 2018『山王遺跡VII三陸沿岸道路建設に伴う八幡・伏石地区発掘調査報告書』第246集
- 利府町教育委員会 2023『羽黒前遺跡』第17集
- 柳沼賢治 2012「福島県浜通り～名取」『シンポジウム東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク発表要旨資料』pp.99-119 東北・関東前方後円墳研究会



第1図 弥生時代～古墳時代の集落動態



第2図 東日本大震災と弥生大震災の津波堆積物



昭和60年頃の岩沼市かめ塚古墳（古墳前期） 写真提供：岩沼市教育委員会

第3図 かめ塚古墳



図・写真提供：岩沼市教育委員会

第4図 平成24年(2012)のかめ塚古墳の調査

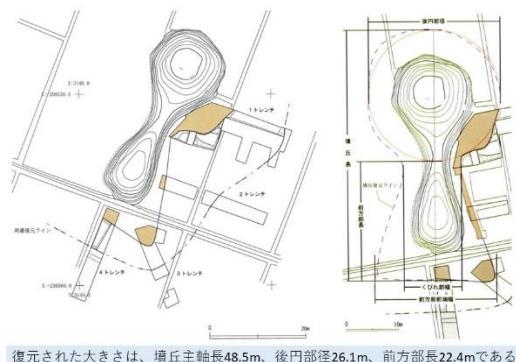


かめ塚古墳周溝底面一木二又鋤出土状況（写真提供：岩沼市教育委員会）

第5図 かめ塚古墳周溝出土一木二又鋤



第6図 押口遺跡（古墳前期-左端：一木二又鋤）

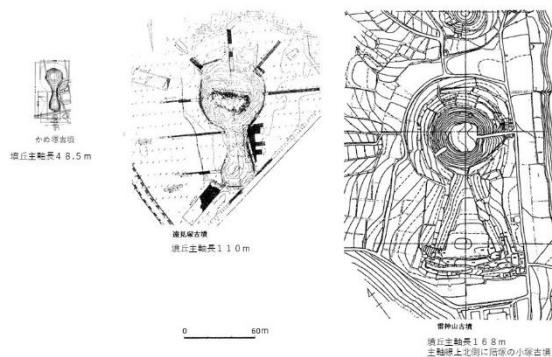


第7図 かめ塚古墳の平面形と暫定計測値



(写真提供：岩沼市教育委員会)

第8図 令和2-3年(2012-13)のかめ塚古墳の調査



第9図 仙台平野の古墳前期の前方後円墳

### 仙台平野における古墳中・後期の拠点集落 －南小泉遺跡－

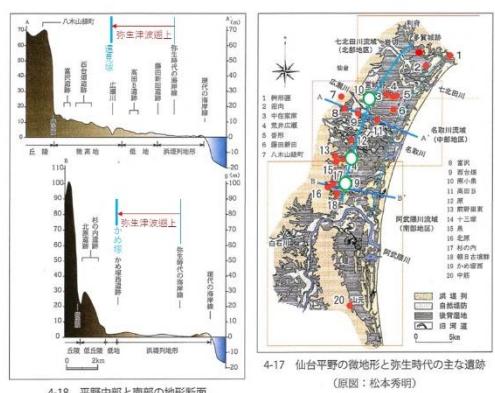
古墳中期から後期（5～6世紀）にかけて、前期に築造された遠見塚古墳の西側に広く居住域が形成されている。石製模造品の製作が行われ、周辺の窯で生産された須恵器が多く出土し、銅鏡も見つかっており、一般的な集落とは異なる。

遠見塚古墳の被葬者の系譜をひく人々が営む拠点集落の存在が考えられる。



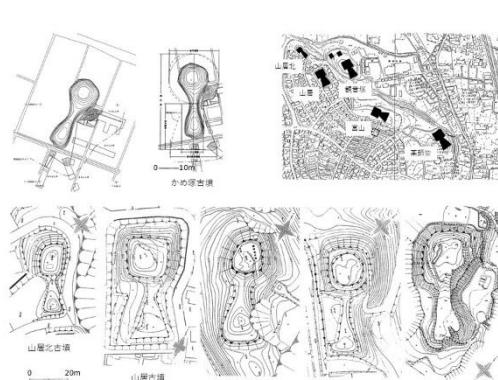
(斎野裕彦2023『最北の国分寺と銀夷社会－仙台平野からみた律令国家』敬文舎)

第10図 古墳中・後期に居住域形成



(斎野裕彦2018「弥生時代の岩沼」『岩沼市史1 通史編I』岩沼市編纂委員会に、加筆)

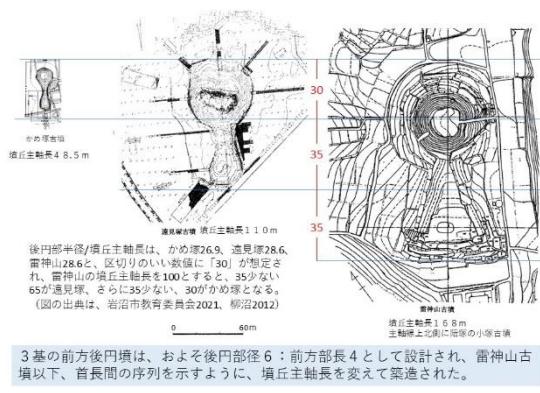
第11図 津波遡上域と前方後円墳3基の位置



第12図 かめ塚古墳と飯野坂古墳群



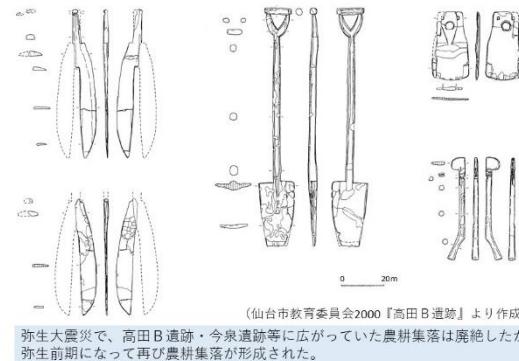
第13図 沼向遺跡の古墳群・方形周溝墓群



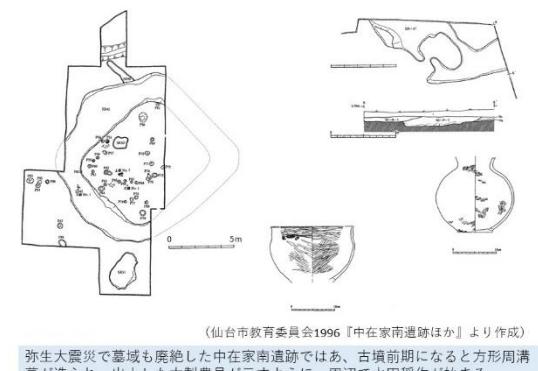
第14図 前方後円墳3基の墳丘主軸長の関係



第15図 藤田新田遺跡(古墳前期)



第16図 高田B遺跡の木製農具(古墳前期)



第17図 中在家南遺跡の方形周溝墓(古墳前期)



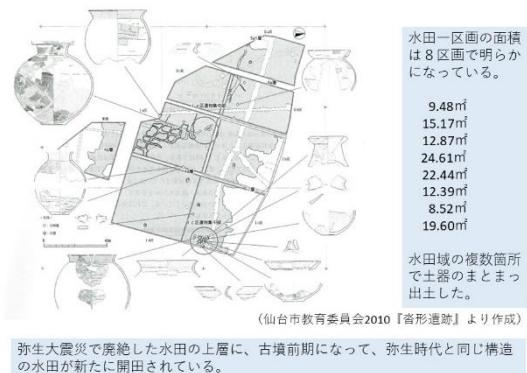
第18図 中在家南遺跡II区の遺物(古墳前期)



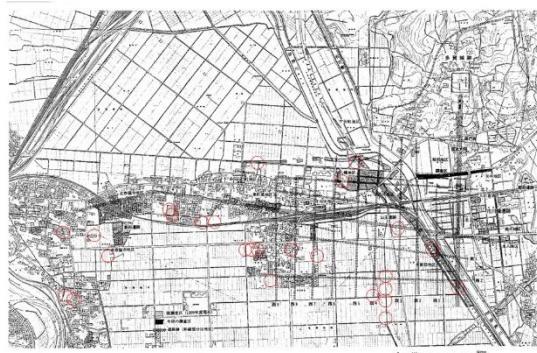
第19図 中在家南遺跡VI区の遺物（古墳前期）



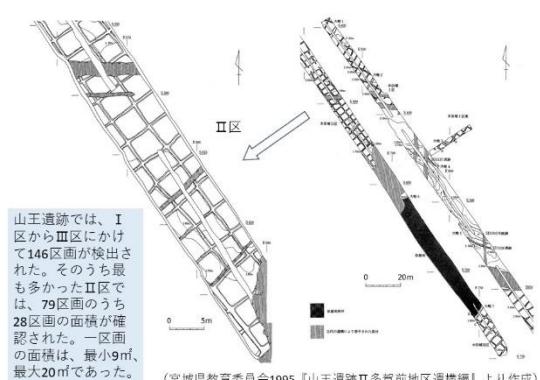
第20図 押口遺跡II区の遺物（古墳前期）



第21図 脊形遺跡の水田跡と遺物（古墳前期）



第22図 山王遺跡の水田調査地点（古墳前期）



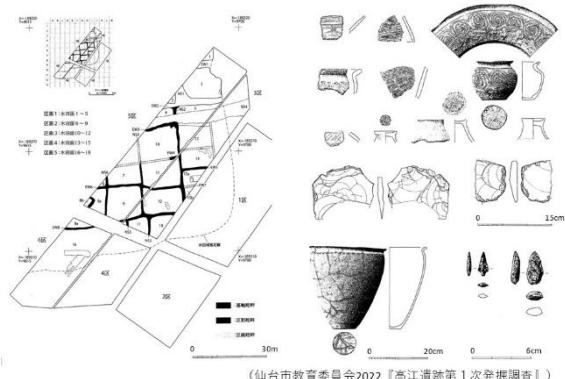
第23図 山王遺跡多賀前地区の水田跡（古墳前期）

仙台平野では、弥生前期（末葉）に小規模な水田が當まれており、複数の類型が認められる。集落を維持しながら生業を再編していく過程で、当初は試行的な水田稻作を行い、その中で、寒冷地に適応したII B類の水田類型を主とするようになる。この類型は、開田地の地形面の勾配を重視する水田で、点播によるイネの直播栽培が行われていた。その後、中期前葉から中葉にかけて、水田域を徐々に拡大しながら、集落群は沿岸部へ進出し、水田稻作を主として集約的で安定した農耕集落が広く當まれていた。

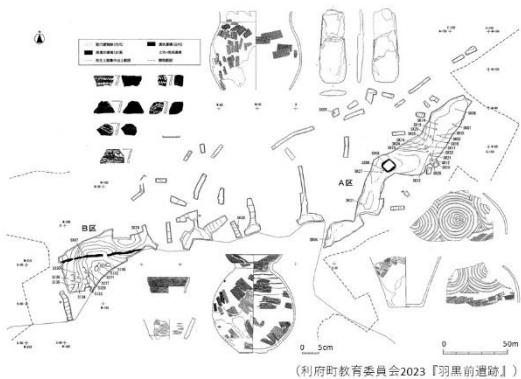
	I A	II A	III A	I B	II B	III B
韓半島	○	○	○			
九州～近畿	○	△	△		+	
中部関東	○				△	
東北	△				○	△

水田跡の構造を類型化  
開田地の設定方法 I：緩傾斜面 II：ほぼ平坦な地形面 III：谷状の地形面  
水田区画の方法 A：地形面の勾配に合わせて行う B：小区画を指向する

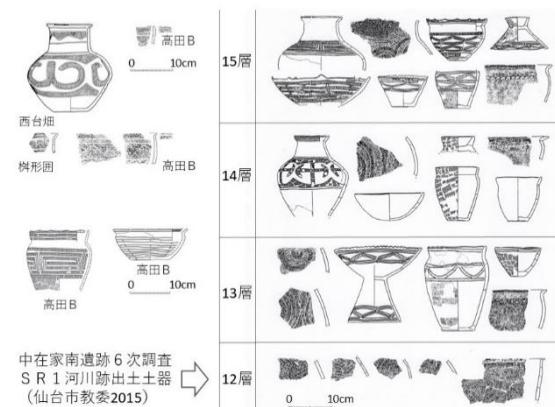
第24図 水田跡の構造



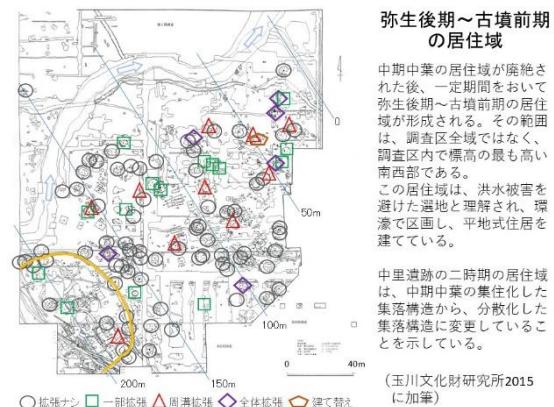
第25図 高江遺跡の水田跡と遺物（弥生中期中葉）



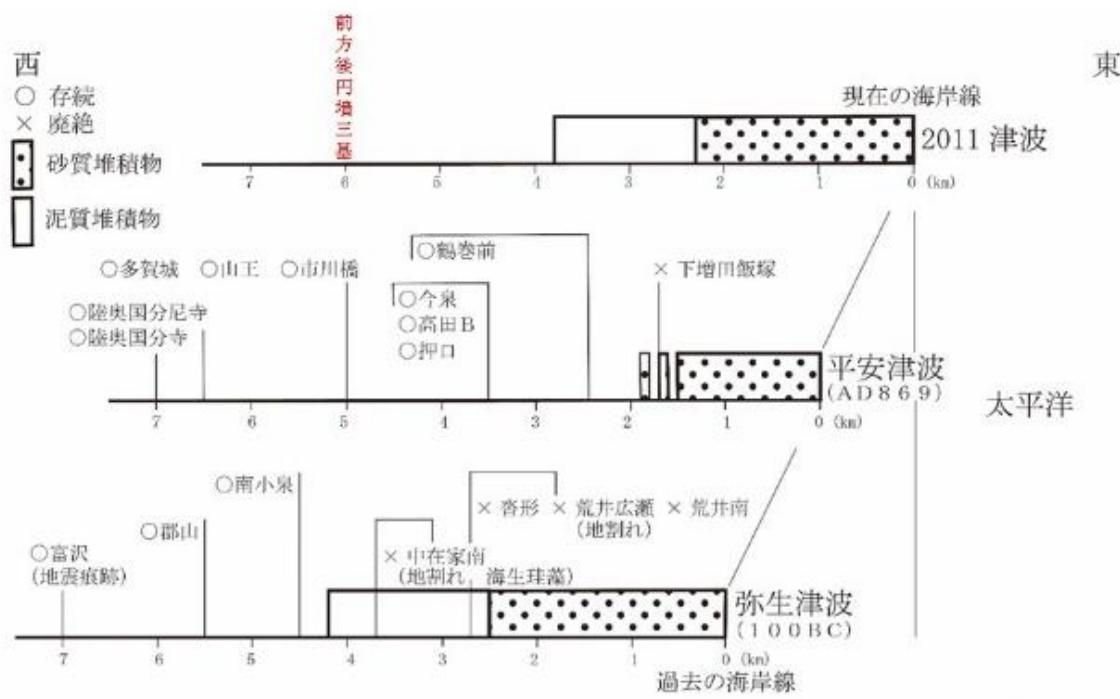
第26図 羽黒前遺跡（弥生中期後葉～古墳前期）



第27図 中在家南遺跡の土器（弥生中期中葉）

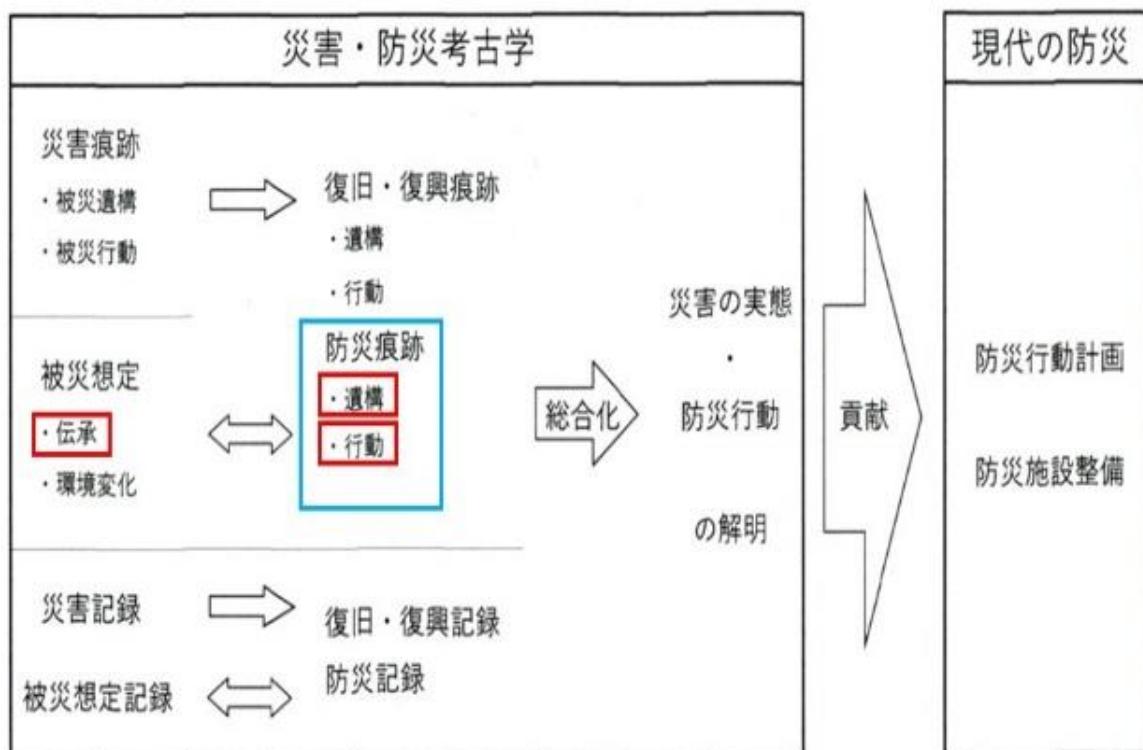


第28図 中里遺跡の遺構群の変遷（弥生中期・後期）



(斎野裕彦2021『東日本大震災と遺跡に学ぶ津波防災』同成社に加筆)

第29図 弥生津波遡上域と前方後円墳の位置



第30図 災害・防災考古学と現代の防災への貢献